電子音響音楽国際研究大会 EMS2017 実行委員会運営報告

水野みか子

１．EMS の組織と 2017 年大会

１－１　EMS2017　概要

2017 年９月４日～８日の日程で、芸術工学部キャンパスをメイン会場として、「電子音響音楽国際研究大会 EMS(Electroacoustic Music Studies)2017」が開催された。基調講演、二つのコンサート、研究発表１４セッションが行われ、その全て、および、レセプション、受付、要旨集編集等、研究大会全体を名古屋市立大学芸術工学部水野研究室メンバーが運営した。研究大会参加者は、発表者、コンサート出品者、聴講者を合わせて約８０名となった。

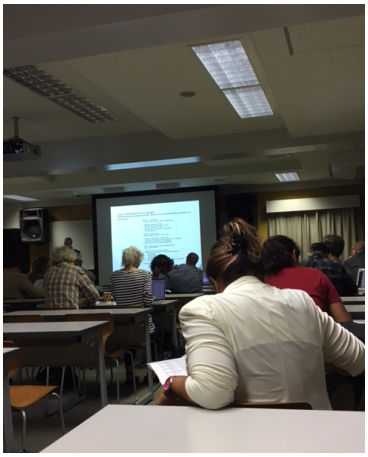
日本で近年開催された音楽関連の国際学会のなかで最も規模が大きいのは、2016 年３月に東京芸術大学と日本音楽学会が共同でオーガナイズを受け持った「国際音楽学会 IMS 東京大会」であり、ここには 600 を越えるペーパーがアプライされ、同時間帯に 10 を越えるセッションがパラレルに行われた。国際会議開催のために２年前に申請する科研と東京都からの助成を主な財源とした IMS 東京大会に比べて、EMS2017 は参加者とオーガナイズチームを合わせて 100 名以下という小さな催しであったので、プロフェッショナルな会議運営企業等への依頼は行わず、関係する研究者、関連学会の有志メンバー、および名古屋市立大学芸術工学部の事務や学生諸君に協力をお願いし、本格的準備を開催１年前に開始した。

要旨査読を経て５７のペーパーを採択した結果、会期中には、発表のために６３名が参加した。参加者の内訳を（表１）に示した。

（表１）　EMS2018 参加者の内訳

国	参加人数（人）
ドイツ	２
フィンランド	１
スイス	２
フランス	７
イタリア	１
イギリス	７
日本	１０
台湾	７
中国	８
香港	１
カナダ	５
アメリカ合衆国	１
コロンビア	１
ペルー	１
メキシコ	１
オーストラリア	５
ニュージーランド	２

EMS 2017 会期中は、研究発表主会場として芸術工学部管理棟３階「A305 教室」を使用し、基調講演とコンサートには図書館棟２階の「大講義室」を使用した。昼食時にはアッセンブリーホールを解放し、また、図書館棟２階西側の準備室を休憩室としてケータリングに使用した。



（写真１）　A305 教室での研究発表

１－２　EMS の目的と趣旨

EMS は、「電子音響音楽の草創と発展、現在の表現とそのインパクトなどを通じて、電子音響音楽をより深く理解することを目指す国際研究組織」[i] である。EMS は、フランスのソルボンヌ大学名誉教授マルク・バティエとイギリスのデ・モントフォート大学のリー・ランディ教授によって、この分野での学問的プラットフォームを共有するために 2003 年に創設され、常に二ケ国語での年次研究大会を開催することを重視してきた。2003 年のパリの IRCAM (国立音響音楽共同研究所)での音楽祭/研究会『レゾナンス』の中で開催されたコロキウム「サウンドと技術にまつわる革新の世紀---資源、議論、分析ツール」は、EMS という組織が存在する前の研究会であったが、これは事実上 EMS の第一回大会となった。初回研究会の後、フランス国営放送の INA/GRM 所長であるダニエル・テルッジ氏もステアリングメンバーとして加わった。

創設当初より、「音楽学から、より学際的領域へ」[ii] と研究方法や研究対象を拡大することをめざし、その成果は、音楽創造の技術を主眼とするものから、今日の社会環境に偏在する電子音響音楽サウンドを対象とするものまで、幅広い範囲をカバーしている。

これまでの年次大会開催地とそれぞれのテーマを（表２）に示す。

（表２）EMS のこれまでの開催地とテーマ

開　催年	開催地	テーマ
2003	パリ	サウンドと技術にまつわる革新の世紀---資源、議論、分析ツール
2005	モントリオール	マルチメディア・コンテキストにおけるサウンド
2006	北京	用語と翻訳
2007	レスター	電子音響音楽の<言語>
2008	パリ	ミュジック・コンクレート 60 年
2009	ブエノスアイレス	過去から受け継がれるものと未来
2010	上海	電子音響音楽を教える：ツール、分析、作曲
2011	ニューヨーク	Sforzando!
2012	ストックホルム	電子音響音楽における意味と意味深さ
2013	リスボン	電子音響音楽をインタラクティブな手法とネットワークにおいて考える
2014	ベルリン	コンサート・パフォーマンスを越える電子音響音楽
2015	シェフィールド	電子音響音楽の技
2017	名古屋	電子音響音楽　< における/を通して > のコミュニケーション

2017 年開催の名古屋大会は「電子音響音楽<における/を通して>のコミュニケーション」をテーマとし、発表公募の際には次のように公表した。「電子音響音楽における、または電子音響音楽を通して可能になった文化的/間文化的なコミュニケーションを議論の核とする。コミュニケーションは、

言語、論理、感覚、知覚、聴取コンテキストなどを共通基盤とする人々の間に成立している。では、電子音響音楽にとっての共通基盤とは何なのか？また、そうした基盤は間文化的な状況にあってはどのように表明されるのか？コミュニケーション・システムに関する電子音響音楽の技術的研究分野として、たとえば、インタラクション、テレマティックス、SNS などのトピックも歓迎する。これ以外に、電子音響音楽研究の分野における様々なテーマでの発表も歓迎される。たとえば、電子音響音楽の歴史、音楽理論、美学、作品分析、社会的様相、用語論、サウンド・エコロジー、ジャンルと様式、教育、研究動向などのトピックも認められる。」

電子音響音楽に関する音楽学的研究は他のジャンルや形式の音楽に比べて歴史が浅く、国際的な研究者コミュニティーにおいて何を議論すべきか、未だ明確な傾向や動向が了解されていないという状況に鑑みて、過去の大会にならって EMS2017 でも、より一般的な概念や対象として以下の a. ～ m. をテーマの例として示した。

a. 分析:

・電子音響音楽を記述するためにどのような論述・用語が適切か。

・どのような分析手法が開発されているか。

・多くの場合プレスクリプティブな記譜を持たない電子音響音楽作品に対して、既存の音楽分析法を適用することが可能か。

b. サウンドの表記と表現、新しいオーディオヴィジュアル・ツール：

・分析ツールはどのように生み出され、コミュニティーの中で普及しているか。

・ソニック・アーツの形とこうしたシンボルやグラフィック表示が有効に使用されるためにどのような手段が考えられるか。

・電子音響音楽研究は、電子音響音楽に特化してデザインされたツールを必要とするのか、あるいは、他の音楽のために考案された手法を利用することができるのか。

c. 用語：音楽記述の「意味として有効な」単位

・どのような分類システムが使われているか、あるいは今後開発されるべきか。

・ 電子音響音楽のようにダイナミックに変化しつつある分野において、用語使用の一貫性をどう確保するのか。

d. リアルタイム音楽生成

・ ライヴ演奏、ライヴ作曲の戦略をどのように分析するか。

・「ライヴの電子音楽」とは何か。

e. パフォーマンス、プレゼンテーション、空間へのディフュジョン

・「作品」とは何か。

・新しい表現空間、諸技術。

・インターネット・コミュニティ、グループ作曲、テレマティックス、パフォーマンスなどによって生まれた美学的・音楽的問題。

f. 聴取, 意志と受容

・ 知覚と解釈。

・作曲家の意図は知覚されるものとどう関係するか。

g. 意味論

・様々な異なる電子音響音楽ジャンルは何を、そしてどのように表現するのか？

h.サウンドスケープ、サウンド・エコロジー：

・ サウンドスケープ理解のためのツール

・ サウンド・エコロジー、ソニフィケーション、音環境に関する新しいアプローチ。

i. ジャンル/スタイル、「言語」

・ 統一、多様性、複数性、多文化資源、ポリスタイル、ローカル・ミュージック

j.ジェンダー問題：

・ ジェンダー・バランスはかつてに比べて変化したのか？

・ テクノロジー/電子音響音楽とジェンダーの関係

・ 議論されていない重要事:歴史の塗り替え

k.電子音響音楽の歴史に関する調査;

・ 歴史的記録に関するリサーチ

l. 社会文化的問題:

・ 電子音響音楽における社会文化的な枝分かれはどのようなものか。

m. 教育

・ カリキュラム・デザイン

・ 理論と実践のバランス、一般的アプローチと特殊なアプローチ

・ リアルタイム・インタラクション vs.フィクスト・メディア、スタジオ技術

・ 教材：どう選ぶか、言語の問題。

２ 開催までの準備

２−１． 関係学会への事前告知

国内の関連学会には約１年前からアナウンスし、９ケ月前には、ホームページと国際関連学会へのメールによって詳細情報を知らせた。以後ホームページでは随時プラクティカル情報を加えていった。要旨等の締め切り１ケ月前、２週間前にそれぞれ関連学会･関連研究者にリマインドメールを送った。ホームページには日本語は書かれていないため、国内の関連学会への詳細情報は、学会ニュースへの掲載や国内研究会の都度の紙媒体での配布などの形で拡散させた。主な情報発信の時期と発信内容・方法を（表３）に示した。

（表３）関係学会への事前告知

時期	発信内容・方法
2016 年９月	愛知県立芸術大学５０周年記念国際シンポジウムにて口頭で告知
2016 年 10 月	国内で開催された国際会議 EMSAN において口頭で告知
2016 年 12 月	国内コンサート JSEM において紙媒体で速報
2017 年 3 - 5 月	国内関連学会等での告知（先端芸術音楽創作学会、日本音楽学会ほか）
2017 年 5 月	関連国際学会、関連研究者へのメールによる CF 情報の確認
2017 年 6 月	国内外の関連学会、関連研究者へのリマインドメール

２−２．名古屋でのホスト・チーム作り

EMS2017 の準備・運営のための名古屋側コア委員会メンバーは、実行委員長としての筆者、芸術工学研究科博士後期課程学生１名、芸術工学部研究員１名、愛知県立芸術大学のポスドク１名の計４名であり、この４名は半年前からそれぞれの担当分野（応募ペーパーの管理および審査員とのコミュニケーション、要旨集のための原稿集約と冊子編集、ホームページ管理、受付コンシエルジュ情報収集等）を統括した。それに加えて、拡大実行委員メンバーとして、芸術工学研究科博士前期課程１名、学部生４名、愛知県立芸術大学大学院博士後期課程学生１名という合計６名が、開催２週間前から実務作業を担当した。

学部学生は英語力も弱く、国際学会を初めて体験する者ばかりだったので、経験豊かな大学院生やポスドクの方に、語学から会議マナーに至るまで様々な事項を事前指導していただいた。会議１ケ月ほど前に、コアメンバーが FAQ の英語バージョンを作成し、学生の学習材料とした。

２−３．国際ステアリングメンバーとのコミュニケーション

開催１年前に、学会リーダーであるステアリングメンバーから、「EMS オーガナイザーへのガイド」を受領し、それに沿って準備を進めたが、名古屋の地域事情に応じて変更する事柄も多かった。コンサートの開催は EMS にとって義務ではなく、その一方で、遠方から参加する方たちのために、開催地の特色あるレセプションが必須とされた。今大会では、名古屋コンベンションビューローからの紹介により、大学関係の催しに長けたケータリング会社に委託し、樽酒を中心とするレセプションを組み込んだ（写真 2）。

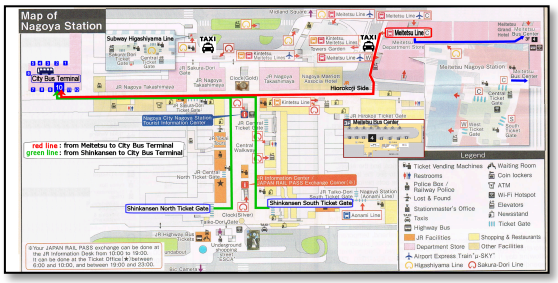
規模の大きな学会では、ペーパー応募・審査は、応募と同

時に機械的に付された ID 番号に基づき、分野や所属に鑑みて自動的に審査員に割り振られて進められるが、EMS2017 では割り振りも集約も手作業で行ったため、短期間で集中的に行う必要があった。そのためステアリング・メンバーと実行委員長は相当数のメールを交換して処理を進めた。

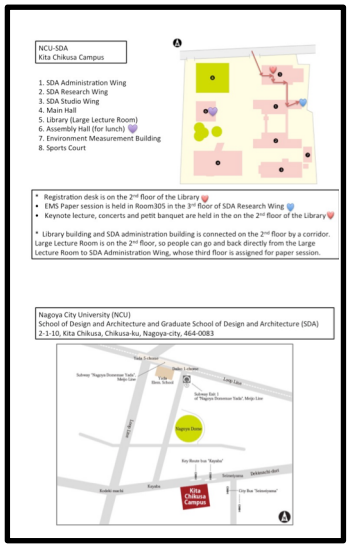
（写真 2）レセプションで法被を着る参加者たち

2−4．アクセス情報の作成

会場である北千種キャンパスへのアクセス情報は、ホスト・チームの中でも、特に学部生に負うところが大きかった。コンベンションビューローから、日本語と英語の紙媒体の地図を８０部いただいたが、この地図も、そしてまた、芸術工学部のホームページでの情報も、海外からセントレアに到着した方には不親切な部分が多くあったので、学部生を含むオーガナイズチームで（図１）～（図 5）を作成した。これらは、名古屋駅構内とバス乗り場（どのバスに乗るか）、名古屋駅または金山駅からキャンパスへの交通手段一覧、バスの乗り方の説明である。加えて、北千種キャンパスマップと近隣地図（ランチマップ）も作成した。



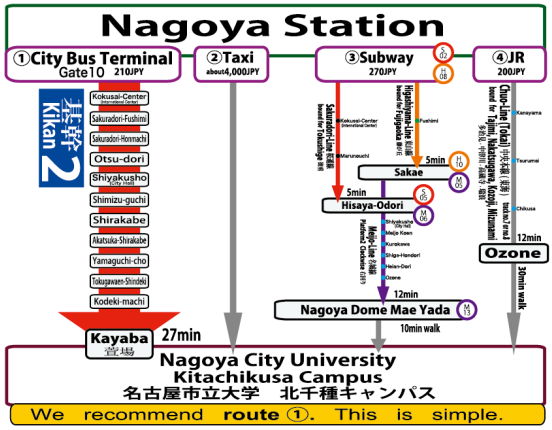
（図１） 名古屋駅構内の案内



（図２）キャンパス周辺案内

（図３）バスの説明

(図４)ランチ・マップ



（図 5） 名古屋駅からの交通ダイヤグラム

これらの情報は、ホームページに掲載するとともに、会期中は、プリントアウトして受付に積み置きした。海外からの参加者の多くが、名古屋に到着してからこれらの付加情報を、

貴重な現地情報として利用したように見受けられた。キャンパス近隣マップは最も人気が高かった。

２−５．要旨集の原稿集約と編集

要旨と研究者プロフィールは不統一フォーマットの PDF として送くられてきたので、コアメンバーの打ち合わせ会議でフォーマットを作成し、海外ステアリングメンバーによるチェックを経て、統一フォーマットに流し込んだ。国によって姓と名の表記順序が異なり、また中国では、アルファベット表記の際にも「姓+名」の順とする場合が多く、また、過去の EMS でも姓と名の表記順序に一貫性は無かった。EMS 17 では、四日間の発表タイトルと発表者名を一覧化した「タイムスケジュール」では、中国からの参加者を「姓＋名」のアルファベット表記とし、その他の参加者は「名+姓」の表記とした。「タイムスケジュール」に続くページには、著者の姓のアルファベット順に各発表者の要旨を掲載したが、そこでは、全ての参加者を「姓 , 名」の表記順とし、姓については全ての文字を大文字にし、名については最初の文字のみを大文字とした。基調講演およびコンサートに関しては別フォーマットを用いた。

２−６．学生主体の会場準備

会議１週間前の作業として、受付マニュアル作成、参加者の名札印刷（name, affiliation）、 EMS17 専用トートバッグへの投入、受付業務の学生への説明、発表会場と控え室のマイク・プレゼン機材・ LAN の確認と確保、トイレや飲食可能場所の英語案内図およびゴミ分別のポスター作成、コンサートのための PA 段取り打ち合わせ等を行った。この段階の作業には学生が積極的に加わり、大学院生や研究員、ポスドクの方から現場作業の多くを学んだ。

なお、１年前から１週間前までの間に１０回の運営会議を行い、各時期の打ち合わせ・作業内容が議事録として残されたので、運営の反省や今後への一助にもなりうる。

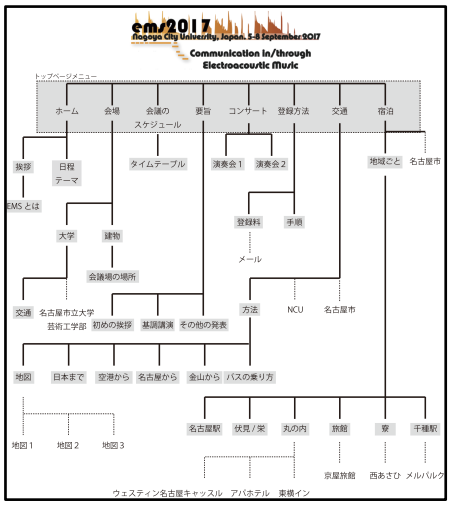
２−７．受付コンシエルジュ機能の学習

国際学会ホストとして、語学力と経験が最も必要とされる場のひとつが、受付である。受付には、登録者確認とコンシエルジュ機能とがある。発表者に関しては、会期に先立って予めオンライン登録されていたので、会場受付での registration は名簿との照合とトートバック手渡しだけだった。一方、コンシエルジュ機能としては、主会場やコンサート会場の案内、発表原稿のプリントアウト、インターネット環境の提供、各宿泊施設への交通手段やバス停の案内、バスの時刻表、複数箇所のトイレ案内、キャンパス周辺の飲食店やクリーニング店の情報、飛行機内の忘れ物の問い合わせ等、多岐にわたる事項への対応が求められた。問題が多様なので英語やフランス語の高い語彙力が必要であり、留学経験のあるポスドクの方に負担が集中したが、芸術工学部の学生たちも片言で手探りの応対に奮闘した。

２−８．URL の活用とプラクティカル情報の伝達

EMS2017 の URL は（図６）に示したようにツリー構造となっており、トップページのメニューは、「ホーム」、「会場」、「会議スケジュール」、「要旨集」、「コンサート」、「登録方法」、「アクセス」、「宿泊情報」の８項目で構成される。

http://www.ems-network.org/ems17/index.html



（図６）EMS2017 の URL の構造

「ホーム」では、EMS 2017 の日程とテーマが大きく示され、EMS についての文章での説明と、さらに EMS について詳しく理解することができる様々な用語へのリンクを掲載した。

「会場」では、開催場所である名古屋市立大学北千種キャンパスの位置とキャンパス・マップを説明した。名古屋市立大学北千種キャンパスの位置については、芸術工学部の HP へのリンクを張ったが、当初、芸術工学部 HP における案内が、外国人には不親切だと思われたので、補足説明を追加した。キャンパス・マップでは、受付、ペーパー・セッションの部屋への動線、休憩室、食堂、トイレなどの情報を強調した。

「会議のスケジュール」では四日分のペーパー・タイトル、発表者名、基調講演、コンサートを一覧化したタイムスケジュールを見ることができる。

「要旨集」では、①今回のテーマ、発表ジャンル、②基調講演の要旨と講師プロフィール、③全てのペーパー発表要旨と発表者のプロフィールが載せられている。

「コンサート」の項では、「コンサート１」「コンサート２」それぞれの作品タイトル、演奏者名、作曲者名を掲載した。

「登録方法」の項には、会議登録料、EMS への入会案内、paypal の支払い方法等が示されている。

「アクセス」情報は、名古屋市の旅行者向けの HP へのリンクと名古屋市立大学の HP へのリンクを張り、それに加えて、（図 1）～（図５）を付加した。

「宿泊情報」では、最初に名古屋市の HP へのリンクを置き、その後、主要な地区、ホテル以外の宿泊施設（旅館、ドミトリー等）を案内した。そこからホテルの HP へリンクを張り、早めの予約を推奨した。また、名古屋市立大学 NCU には四つのキャンパスがあるので、間違いなく北千種キャンパスへ来ていただくよう、注意を促した。実際、２名の参加者が、川澄キャンパスに行ってから四苦八苦して北千種キャンパスにたどり着いたとのことであった。

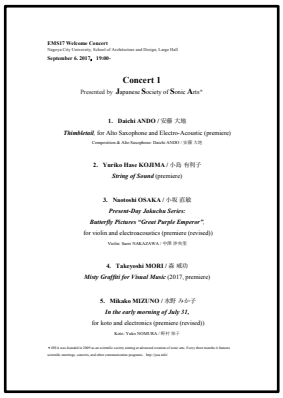
（図７）EMS2017 のメインポスター

３.基調講演

会期初日夕方、基調講演として桐朋学園大学の沼野雄司教授に英語講演を行っていただいた。これに関する詳細は本誌別稿「環境デザイン研究所活動報告」の該当ページを参照されたい。

４．二つのコンサート

会期二日目と三日目の夕方には、「ウェルカム・コンサート１＆２」を開催した。「ウェルカム・コンサート１」では先端芸術音楽創作学会の会員による６作品が上演され、「ウェルカム・コンサート２」では日本電子音楽協会のフィクスト・メディアによる６作品が上演された。EMS 要旨集にもコンサートの内容ページが含まれているが、それとは別に、各コンサートのために、作曲者および演奏者のプロフィールと演目解説を掲載した「プログラム」を作成した。それぞれのコンサートの演目と演奏者を（図８）に示した。



EMS17 Welcome Concert
Nagoya City University, School of Architecture and Design, Large Hall
September 6, 2017, 19:00-

Concert 1
Presented by Japanese Society of Sonic Arts*

1. Daichi ANDO / 安藤 大地
Thimbletail for Alto Saxophone and Electro-Acoustic (premiere)
Composition & Alto Saxophone: Daichi ANDO / 安藤 大地

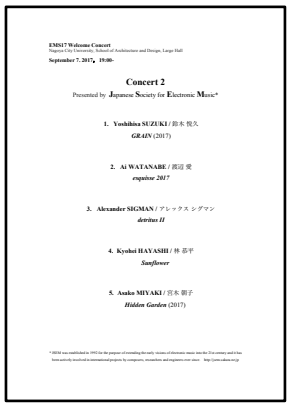
2. Yuriko Hase KOJIMA / 小島 有羽子
String of Sound (premiere)

3. Nautoshi OSAKA / 小坂 直敏
Present-Day Jokucho Series:
Butterfly Pictures "Great Purple Emperor"
for violin and electroacoustics (premiere (revised))
Violin: Saori SAKAZAWA / 今澤 沙知恵

4. Takeyoshi MORI / 森 威功
Misty Graffiti for Visual Music (2017, premiere)

5. Mikako MIZUNO / 水野 みか子
In the early morning of July 31,
for koto and electronics (premiere (revised))
Koto: Yuko NOMURA / 野村 祐子

* ISEA was founded in 2009 as an scientific society aiming at advanced creation of sonic arts. Every three months it features scientific meetings, concerts, and other communication programs. http://jsea.info/



EMS17 Welcome Concert
Nagoya City University, School of Architecture and Design, Large Hall
September 7, 2017, 19:00-

Concert 2
Presented by Japanese Society for Electronic Music*

1. Yoshihisa SUZUKI / 鈴木 悦久
GRAIN (2017)

2. Ai WATANABE / 渡辺 愛
equinoxe 2017

3. Alexander SIGMAN / アレックス シグマン
detritus II

4. Kyohei HAYASHI / 林 恭平
Sunflower

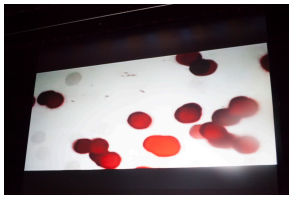
5. Asako MIYAKI / 宮木 朝子
Hidden Garden (2017)

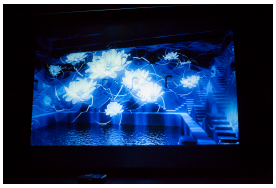
* JSEM was established in 1992 for the purpose of extending the early visions of electronic music into the 21st century and it has been actively involved in international projects by composers, researchers and engineers ever since. http://www.jsem.or.jp

（図８）EMS17 ウェルカムコンサート１＆２の演目一覧

（写真 3）コンサートの設営をする鈴木悦久氏（芸術工学研究科博士後期課程）

（写真 4）大講義室でのコンサートと終了後の交流





（写真 5）コンサートで上演された視聴覚作品

４．芸術工学部での教育との関わり

今回参加した学部生４名は、公式用語を英語とする国際学会に関わることが初めてであったため、研究発表での機材担当、設営、会場案内、交通アドバイスなど全ての面で戸惑っていた。ただし、学部１年生の「情報処理基礎」の授業において、すでに、名古屋駅から北千種キャンパスまでのアクセス情報やキャンパス近隣地図を英語で作成する課題を実施していたので、交通案内には若干とりかかりやすかったようである。コンサート会場の PA 設営や進行チェックは学部授業等で学習経験があった。今回の運営参加により、会議受付回りに備えておくべき情報について学習した。研究発表の中には、先端技術を使用したパフォーミング・アーツのプリザベーションに関するものがあり、本学大学院博士前期課程の森崎浩由の研究と近い分野にあり、彼にとって特に有益であった。

５　国際学会ホスト校としての問題点

北千種キャンパスの環境には、国際会議のホスト校として改善が望まれる部分がある。とりわけファシリティの問題点が認識され、トイレ、ゴミ箱まわり、受付ボードなどの整備の必要性が明らかとなった。大講義室は２階に位置するが、階段以外のアクセスは管理棟まわりとなるので、海外から到着したばかりの方々には不便である。

（写真６）　大きな荷物を持つ方への対応

今回は（写真６）のような応急処置で対応した。３６時間以上のフライトを経て北千種キャンパスに来られる方も数名おられた。このような方々に敬意を抱くとともに、大学が国際社会に開くための問題点を発見した。

---

i http://www.ems-network.org/spip.php?rubrique1
ii ibid.